



イチロー選手型研究者

東京大学大学院の平田岳史先生より本リレーエッセイのバトンを頂戴しました、味の素株式会社の荒川哲大と申します。平田先生と初めてお会いしたのは2014年のWinter Conference on Plasma Spectrochemistryでした。先生との出会いがLA-ICP-MS研究をスタートするターニングポイントとなったことは疑いようもありません。2017年には先生の紹介により、ドイツBAMにあるDr. Norbert Jakubowskiの研究室への研究留学も叶い、企業研究の枠組みから離れた縛りのない自由で贅沢な時間に身を置くことができました。このようなエッセイの執筆は初めての経験ですが、何事もチャレンジの精神で楽しみたいと思います。

さて、執筆に際し「ぶんせき」とは何であろうかと改めて考えてみました。広辞苑には、“ある物事を分解して、それを成立させている成分・要素・側面を明らかにすること。”と記載されていました。この説明を見て、最初の上司であった宮野 博氏（現 分析化学会副会長）から聞いた分析の魅力についての話を思い出しました。要約すると、“物事の発見に最初に立ち会えるのは分析科学者の特権であり魅力である。”といった内容です。それ以降、企業研究において顕在化しているニーズを満たすだけでなく、大なり小なり発見（付加価値）を見だし、事業にフィードバックすることを心掛けてきました。

企業内での研究領域は、食品、細胞、医薬、動物、化粧品、および材料分野と多岐にわたります。分野が違えば‘お作法’が異なるので、相応のリテラシーを身につけるまでは大変でした。しかしこの環境は、好奇心だけは強い性分に合ったようで、結果として社内外共同研究においてヒットを積み重ねることができました。

ヒットを打つ要領が掴めてきた頃に転機が訪れました。それは、海外研究留学のチャンスです。これは、‘ヒットもいいがホームランを狙え’という期待が込められた投資に他ならず、利益追求する企業において、これがどれほど贅沢なことかは言うまでもありません。

かくして、2年間のドイツBAMでの研究留学を通して、海外で活躍する研究者や文化を知り、少なからず成長できたのかなと振り返りながら、研究者としての第二幕がスタートしました。かのイチロー選手は、一塁に出塁する事を第一に考えてヒットを量産していたことは多



写真 愛猫のベストショット

くの人の記憶に残っていると思います。しかし日米通算成績としては、ヒット4132本に対してホームラン235本と、意外と多くのホームランを記録しています。企業研究における短期的/長期的な成果をヒット/ホームランに置き換えた場合、チャンスに応じてスタンドまでボールを運ぶことのできるイチロー型の研究者はまさに理想的と言えるのではないのでしょうか。まだまだ未熟者ですが、視野を広く構え、ホームランになり得るボールを力強く打ち返し、スタンドまで運べるよう日々の研究活動を楽しんでいきたいと思っています。

ところで、掲載した写真は我が家の愛猫です。スマホの機種変更の際し、この猫の愛くるしさを収めようと2時間ほど追いかけて回して撮ったホームラン級（自称）の写真です。もちろん、このままでは猫バカの独りよがりではしかありません。ワクワクする成果を聴衆に魅せ、楽しませることができる分析科学者こそ、超一流のエンターテイナーであるイチロー選手型研究者になり得るのではないのでしょうか。

今回は産業技術総合研究所の宮下振一先生にバトンをお渡ししたいと思います。先生はICP-MS研究の先輩として学会だけでなくメールでの研究相談など、とてもお世話になっております。今回も突然のお願いにもかかわらず快く引き受けていただきましてありがとうございました。よろしくおねがいします!!!

〔味の素株式会社 荒川哲大〕